

ハツクルベリイ・フィンのアメリカ

——『沖繩ノート』とユダヤ系アメリカ人の身体——

服 部 訓 和

本稿では、『沖繩ノート』（一九七〇・九）を、それが書かれた冷戦の時代に置き直して検証する。具体的には、『沖繩ノート』に至る大江の営為をたどりながら、それが冷戦構造、とくにアメリカ側のそれに規定されるあり様を可視化する予定である。

とは言え本稿の目的は、『沖繩ノート』の政治性を批評し、否定することにあるわけではない。ここでは、「日本人」の沖繩への無知の権力性^①を先駆的に批判したと再評価される『沖繩ノート』の、また、沖繩戦の記憶の抹殺を目論む者を「人間」という普遍的な価値をおとしめている^②と批判する大江の「正しさ」の来歴を、いったん検証しておきたいと思う。その作業は結果として、大江自身が語り、大江研究が踏襲してきた作家イメージ——「谷間の森」で民主主義を刻印され、普遍的な人間性を追究した——を対象化する作業ともなるはずである。とまればまず、『沖繩ノート』を冷戦史のなかに置き直すことから始めたい。

一、冷戦の「傷痕」——『沖繩ノート』のスタイル

周知の通り、キューバ危機の一九六二年頃から、アメリカ経済の停滞、中国核実験を受けての冷戦の多極化といった事態が生起し、日韓の国家的・経済的な自立が冷戦戦略の必要から要請された。かかる対日政策の転換は、高度成長に向かう日本にとってむしろ時宜を得たものだったと言える。しかして、日本の国家的「自立」を図る動きは、アジアへの経済的進出や日韓基本条約、小笠原・沖繩「返還」要求、ひいては沖繩戦の記憶の修正といった、「戦後」の「清算」の動きに結びついていく。

『沖繩ノート』がかかる冷戦構造の再編成と深く関わって成り立っていることは、その旅行記の変遷を追えば瞭然とする。以下に見ていくように、大江は中国から東欧・ソビエト・西欧、アメリカへと訪問先を東側から西側へと移しながら、その旅行記を、主観的で個人的な思索を全面に出した『沖繩ノート』の

スタイルへと生成させていくからである。

一九六〇年、中国から帰国した大江は、「中国の若い人たち、子供たち」(『写真・中国の顔——文学者の見た新しい国』一九六〇・一〇)、「孤独な青年の中国旅行」(一九六〇・九)等の文章を著している。一連の文章をめぐって確認しておくべきは、それが中国で見た事実を報告する性質が強いこと、日本の青年とは対照的な中国の青年の「明るい眼」を強調していることである。中国の青年が「明るい眼」を持っているのは、「中国の土のうえにいさえすれば未来にむかつて前進する希望をえることができる」(『戦後青年の日本復帰』一九六〇・九)からだ大江は言う。この時期の大江が、たとえば『われらの時代』(一九五九・七)において、日米同盟下の青年を「不健全」な存在として描き出したことを想起すれば、「明るい眼」とは、民族自立の観点から、青年の生を支える公共性——愛国心——を構築できない日本の「不健全」さを反照すべく仮構されたものと理解される。

しかし、一九六二年に東欧・ソビエトから西欧へと旅した際には、中国旅行の際の「明るさ」と対比し、「あいまいでもっと暗かった」(『旅行靴のなかの未来イメージ』一九六二・二／一二)旅の印象が語られる。と同時に、自身の書く旅の報告が「ぼくの空想で歪んだ眼にうつった風景」(同前)であることが強調されるようになる。かかる転換をもたらした要因として提示されるのは、①「キューバをめぐってアメリカとソビエトが対立した」(『憲法についての個人的な体験』一九六四・七／八講演↓一九六五・

三) 事態や、「《現実となった中国の核武装》」(第二部のためのノート)『厳粛な綱渡り』一九六五・三)という冷戦史の事件であり、②民主主義への信頼が「いまや、戦後世代すべての一般的な生活感覚とはいえなくなつてい」(『戦後世代と憲法』一九六四・七／一六―一八)く、「戦後」の「清算」の動きである。冷戦の対立構造が多極化し、冷戦の断絶線の向こう側に仮構され得た共同体のモデルが失効するなかで、個人的立場や思索を前景化するスタイルが徐々にかたちをなしていくのである。

続く『ヒロシマ・ノート』(一九六五・六)から『沖縄ノート』にかけて、「ノート」の名を冠した大江の旅行記が、小説・エッセイとは異なる「もう一つの領域」³⁾として生成していくさまはすでに山下若菜が描き出している。『ヒロシマ・ノート』以降、大江の旅行記は、個人的な思索を開示するスタイルを前景化する。障害を持つ息子が誕生し、「友人」が「パリで縊死」したという「個人的な事情」の述懐から始まる『ヒロシマ・ノート』では、「自分自身がおちこんでいる憂鬱の穴ほこ」から「よじのぼるべき手がかり」を得るために広島を訪れ、「もっとも正統的な原爆後の日本人とみなす人々」と出会い、思考する過程それ自体が開示される。その記述を通し、自分自身の、ひいては「日本人」のあり様が問い直されていくことになる。

『ヒロシマ・ノート』刊行直後、大江は初めて沖縄、アメリカを訪れた。アメリカ旅行に向かう大江の企図は、間違った自立を果たそうとする日本を批判する立場から、戦中・戦後と二重

に自身を規定してきたアメリカ、および自分自身を問い直すことだった。この旅をめぐる思索は「アメリカ旅行者の夢」(一九六六・九〇六七・一〇)にまとめられる。それは後に「ヘロシマ・ノート」とおなじ形に独立させて刊行³され、自身の「感じ方や考え方」の「レジュメ」の役割が与えられるはずだったが、暗礁に乗り上げたまま放擲された(この本全体のための最後のノート)『持続する志』(一九六八・一〇)。

先の山下は、このアメリカ旅行記が『沖縄ノート』の形成に大きな役割を果たしたことを指摘している。とくに重視するのは、アメリカで実際に出会ったラルフ・エリスンの影響である。『見えない人間』(一九五二)でエリスンは、黒人を「見えない人間」にしたアメリカの白人中心主義の歪みを抉り出し、「多様性」に満ちたアメリカを待望する場面で物語を閉じた。この「多様性」の概念に学んだ大江が、「歴史上「持続的に歪んで行った」日本人によって、「見えない人間」として扱われ続ける沖縄の、更に広島・長崎の、その核心に存在する「沖縄なるもの」「広島なるもの」を、自らの〈多様性のある想像力〉において把握すること」を志向した結果、「痛苦の「声」を我が身に反響させ、内在化させた上で、これを言語化し記憶する営みによって、努めて「対象の多様性をすくいと」ろうとする」『沖縄ノート』のスタイルが導かれたと言っているのである。

『沖縄ノート』本編冒頭には、沖縄からの「声」に心身を引き裂かれるさまを、読点を多用した文体によって開示する『沖縄

ノート』のスタイルがあらかじめ提示されている。

僕は沖縄へなんのために行くのか、という僕自身の内部の声は、きみは沖縄へなんのために来るのか、という沖縄からの拒絶の声にかさなりあって、つねに僕をひき裂いている。「…」／僕はかれらをなお深く知るために沖縄へ行くこうとする、しかしかれらをより深く知ることとは、かれらが優しく、かつ確固として僕を拒絶していることを、絶望的なほどにもはつきりと認識することなのだ。それでもなお僕は、沖縄へ行くこうとする。その自分を僕は、時どき、まったく客観的に自分の視野にとらえると感ずることがある。逃げだしてゆく自分の背を、自分の眼で眺めているように。「I」

こうした身体的・自己開示的な『沖縄ノート』のスタイルについては新城郁夫も、「不測の他者としての沖縄の「かれら」の拒絶の声が笈し、拒絶の声の領有不可能性に直面するしかない大江自身の心身の分裂が、沖縄から受けた傷痕となって呈示されていく」と評し、『沖縄ノート』の批評性の中心に据えている。『沖縄ノート』では、沖縄からの拒絶の声が「ぼく」自身の身に反照されることで、言語化困難な沖縄への眼差しが可視化されていく。ここでは『沖縄ノート』に刻み込まれた「傷痕」が、冷戦体制において沖縄を分断し続ける「二十七度線」に象られた「傷痕」であることを付け加えておけばよいだろう。

百年間、二十七度線ごしにあからさまな差別の紐帯が結ば

れてきたのだ。その沖繩がわの片はしを揺さぶれば、日本の本土のがわの片はしも確実に揺れはじめる。〔Ⅷ〕

三十八度線に倣った「二十七度」という言葉は、当時「復帰」運動で「好まれた比喩の一つ」⁶⁾だった。やがて癒えるべき傷としての「二十七度線」の比喩は、「母親のふところにかえる」といった考え方「〔Ⅰ〕と相俟って、沖繩を日本という身体に包摂してイメージさせ、「復帰」運動を国民運動とするうえで重要な役割を果たした。だが、『沖繩ノート』のそれは決して癒えることのない「傷痕」として刻み込まれ、「日本人」が沖繩を「朝鮮戦争からヴェトナム戦争にいたる、ずっと持続した戦争の現場」〔Ⅹ〕に置き続けていることを可視化している。身体的・自己開示的な『沖繩ノート』のスタイルは、それ自体が冷戦によって刻まれた「傷痕」の表現でもあるのだ。

以上をふまえれば、『沖繩ノート』は冷戦構造の再編成のなかでこそ生成されたものと確認できよう。わけてもアメリカ体験は、『沖繩ノート』に深く内在化されているようである。では、大江のアメリカ体験はどのようなものだったか。

二、沖繩のハックルベリイ・フィン——アメリカ体験

大江のアメリカ旅行は、中国・ソビエトの場合と同様、アメリカ側からの招待旅行だった。プログラムは大きく二つが予定された。①ハーバード大学国際夏期セミナーへの参加、②アトランタとミシシッピへの視察旅行である。

①は、ロックフェラー財団等が資金を拠出して有識者を招待する国際交流プログラムである。コーディネーターは後の国務長官ヘンリー・キッシンジャー。この年の講師は、ロバート・リフトン（精神分析学）、デイヴィッド・リースマン（社会学）、ハンス・モーゲンソー（国際政治学）、ハーマン・カーン（核戦略理論）、ラルフ・エリソンといった面々だった。当時の学術界の先端にあつたリフトンやリースマンに加え、大江の「核時代の想像力」論に影響を与えた国際政治学の父モーゲンソーがおり興味深いのが、ここでは彼らがエリソン同様ユダヤ系アメリカ人であることのみ指摘しておきたい。

②は政府機関による国際交流事業——インターナショナル・ビジター・プログラム（IVP）——であるが、アメリカを広く知ってもらおうという趣旨のもと、訪問先は参加者の希望により決定されていた。大江の場合、アトランタは黒人運動の拠点を視察するため、ミシシッピは『ハックルベリイ・フィンの冒険』（一八八五）⁷⁾の舞台を訪れるための選択である。

①エリソンへの関心と②訪問地の選択に連続性があることは、セミナーでのエリソンの講義に対する大江の反応に明らかである。エリソンはそこで「かれ自身の小説が『ハックルベリイ・フィンの冒険』や『白鯨』にそのままなっていることをあきらかにしようとした」⁸⁾が、それを受けて大江は「確かに、『見えない人間』の黒人青年は、黒い肌をしたハックルベリイといふべきであろう」（『アメリカ旅行者の夢Ⅴ——不可視人間と

多様性——」一九六七・一〇」と、二人の主人公を重ね合わせている。

大江によればハックルベリイ・フィン（以下、ハック）は、「アメリカへの恐怖心や憎悪、あるいはアメリカへの全面的な依存、屈従の影響下にあるどちらの時代においても、アメリカに癒着していない自由なヒーロー」だった。『ハックルベリイ・フィンの冒険』でハックは、黒人奴隷ジムを「正当な持主」たる白人に密告する手紙を書いたものの、懊悩の末に「ぢゃあ、よろしい、僕は地獄に行かう」と述べて「その紙片を引き裂」く。ハックが属した社会の価値観に照らす限り、それは「神」を恐れぬ「邪悪」な行為である。だがその行動をやつてのけたハックは、「社会の秩序の内側にいるトム・ソーヤア」とは異なり、「社会の外側にあつて自由に、かれ自身のための地獄を選択する」ことができたのだと言う（「アメリカ旅行者の夢Ⅰ——地獄にゆくハックルベリイ・フィン——」一九六六・九）。

こうしたハック像には、当時の大江自身の課題——「広島を体験したことを核心においた」「日本人の新しいナシヨナリズム」の確立——が投影されていた。国際夏期セミナーで自身が講演した際に大江は、「日本人の新しいナシヨナリズムを期待して働いている」と語つたが、聴衆の反応は、「それはアメリカに対してはどのようなようにあらわれるナシヨナリズムなのか？」、「パール・ハーバーの記憶は、それに影響しうるのか？」と、アメリカの憎悪を露わにしたものだった（「アメリカ旅行者の夢

IV——パール・ハーバーにむかつて——」一九六七・九）。この講演の場に現れたような、憎悪の連鎖を生むナシヨナリズムの国家的様態を超えた「難民」のナシヨナリズムを模索するために、国権や権威から「自由なヒーロー」としてのハックが必要とされたのである。

やがてハックのすがたは、「移民こそアメリカだ」と述べたユダヤ系移民史学者オスカー・ハンドリンの『The Uprooted』（一九五二）⁸が描いた移民のすがた、「おとなしい家畜のような沃野から、自分自身の根をもぎとることを、経済的変化をはじめとするもろもろのものに強制されて、やむなく新大陸の曠野に渡つてきた『根なし草』の子孫たち」（「アメリカ旅行者の夢Ⅱ——アメリカの夢と悪夢——」一九六六・一〇）のすがたに重ねられる。「自然」への畏敬の念と「迷信深さ」を備えるハックは、アメリカの根源をなす移民の精神を保持しているゆえに、新しいナシヨナリズムの可能性を拓く「ヒーロー」たり得る。

「根無し草」としてのハック像はさらに、沖繩旅行で発見した「根所」という言葉を契機に書き上げられた『万延元年のフットボール』（一九六七・九）の根所鷹四に受け継がれる。アメリカから「谷間」へ戻つた鷹四は、「谷間」の「協同体」がすでに失われていることに気づき、「根無し草」としての自己を発見する。鷹四は曾祖父の弟に自己を重ねながら、村の古い習慣を再現することに執念を燃やし、「いったんは失なわれてしまった村の協同体の精神」を「一挙によみがえらせることをめざ」す

〔「未来へ向けて回想する——自己解釈（四）——」一九八一・二二〕。アメリカから帰国して後の大江は、「共同体」（「協同体」）の課題を、「多様性」の概念を軸に検討している。『核時代の想像力』（一九七〇・七）では、「白人の多様性、黒人の多様性」が共存する社会を「アメリカの希望」と語った『見えない人間』が参照され、「日本人も、アメリカをふくめて、世界全体に多様性を認めるしかた」で「未来を考える、アメリカとの関係を考えることが必要だろう」と、「多様性」に満ちた「共同体」を志向している。『沖繩ノート』第三章「多様性にむかって」では、「僕は多様性において沖繩をとらえることをしたい」と語り、「共同体」の「単純化」した「把握」を忌避しながら、「多様性」に満ちた「沖繩につながる具体的な人間の様ざまな顔を思い浮かべる」。『沖繩ノート』は、沖繩の多様な人々との「友情」の結び直しの物語として緊密に構造化されており、それ自体を「多様性」ある「共同体」のための実践^{パフォーマンス}として読むこともできる。たとえば第一章には、『沖繩ノート』全体を貫く、「友情」の結び直しの物語が予告的に提示されている。

第一章ではまず初めて沖繩を訪れた際に犯した錯誤が書き付けられる。「沖繩の戦後世代」（一九六五・六）に大江は、設備が貧弱な琉球少年院に収容された「非行少年」が「暴動」を起こさないのは、「教官たちへの男らしい友情が働いている」からだ^{と書いた}。そこには、沖繩の戦後世代にも民主主義が根付いているという思いが投影されていた。しかし再訪の際、そうした

臆断に満ちた「本土」の「日本人」の眼差しこそが沖繩の人々を「見えない人間」にしていることを思い知らされる。「僕」は、その「穴ぼこ」から立ち直る契機をつかむために、「おまえは本土の日本人の薄汚ない魂の平安のために」「フィクションを必要としたにすぎないのではないかね？」という「非行少年」の声を「想像」してみせ、そして告発する「非行少年」のイメージに、「僕」を拒絶する者たちのイメージを連鎖させていく。

「想像」されたイメージは、まず「性倒錯のアメリカ人」から救助しようとした「僕」を「理解を拒む方言」によって「拒絶」した「少年たち」へ、続いて「本土」で孤立し「強盗」を働いた「沖繩の三少年」へとイメージは連鎖していく。そして「強盗」した「少年」が「日本」へ突きつけた「ナイフ」のイメージが、「少年」たちを「強盗」に追い込んだ「日本」の「ナイフ」のイメージへと読み替えられたのちに、一篇の詩——「北緯二十七度線は／波に溶け／ジャックナイフのように／ぼくらの心に／切りつけてくる。」——が作品に呼び込まれ、「詩人」新川明がすがたを現す。「詩人」は穏やかに、しかしもつとも激しく「僕」を拒む。それでも「僕」は、無残な傷を晒しながら繰り返し沖繩に渡り、彼らと「友情」を結びたいと願う。

『沖繩ノート』は、ここに凝縮された「友情」の結び直しの物語を、全篇にわたって語り続けているとも言える。「プロローグ」には、「怒りをこめてわれわれのうちに生きつづけ」る「死者」古堅宗憲の「幻」が配され、本編では「多様性」を帯びた

沖繩の他者の「顔」——謝花昇・伊波普猷・林世功・大田昌秀・劇団創造——が次々に召喚される。そして『沖繩ノート』の掉尾を飾る第九章では、あらためて多様な「顔」が「立ちならぶ」。

日本および日本人から放置されてきた沖繩の人間が、どのようににがい民衆意識、意識構造をあらためて獲得して、日本、アジア、世界へとひろがる鋭い、幻想なしの展望の中心にかれら自身を置くにいたったかを、それにつなげて考えようとすれば、もつと若くもつとたくましい面だましの沖繩の人々が、まさにはつきりと、しかも多様に、僕の眼のまえに立ちならぶ。〔IX〕

このような、繰り返し拒絶されながらも見出されようとする「幻」の「友情」の絆はすでに、「差別の紐帯」を根拠にした新しい「共同体」の基礎的なモデルともなっている。そこで反復帰論者新川明は、既成の「共同体」に「癒着していない自由なヒーロー」ハックの役割を与えられている。

だが、ここで立ち止まって考える必要がある。『沖繩ノート』で希求される「友情」の結び手が「僕」を「拒絶」する男性知識人ばかりであるという事実は、『沖繩ノート』の語りの偏差と平仄を合わせている。すでに詳細な分析があるように、『沖繩ノート』では、①「沖繩の女はただの二人」の「狂女」しか描かれず、②少年たちは、「ほとんどいかなる者の眼にもあきらかであろうところの性的倒錯者」のアメリカ人に脅かされる、「襲われようとしている小娘みたい」な「美しい少年たち」〔I〕と

して描かれる。『沖繩ノート』の語りには女性嫌悪・同性愛恐怖の傾向が刻印されており、性的アレゴリーのもとに表象される沖繩は「日本人」を問うための否定的媒介とされる。こうした指摘にならって言えば、男性知識人たちの「友情」に依拠した「共同体」には、「友情」の結び手たり得ない存在を排除する力学が内包されていることになる。

ただし本稿で興味深いのは、そうした歴史性の来歴である。『沖繩ノート』に内在化された女性嫌悪・同性愛恐怖の傾向は、「アメリカの冷戦政策の特質——「女性」と「同性愛」の「封じ込め」——とも似通っている。『沖繩ノート』と言えば何より圧制者アメリカが想起されるが、実はより周到に、アメリカのすがたは『沖繩ノート』に影をおとしているのではないか。^⑩

大江のアメリカ体験をまとめた一條孝夫は、「人類の〈多様性〉を重視する考え方は、一九八〇年代以降、人種・民族集団など〈エスニックなアイデンティティ〉を尊重する〈多文化主義〉の概念に収斂され、それが政治の領域であれ歴史研究であれ、グローバルな視点にまで拡大されつつある」という情勢分析を行い、「多様性」への視点においてエリソンと大江を称揚している。たしかに「多様性」の概念は、現在では普遍的な概念に思える。しかし、『見えない人間』の主人公が語る「多様性」の概念が、アメリカ建国の信条「多数から一つへ」と一致することは、その語り「女性」の内面を的確に「封じ込め」ている事実とともに指摘されている。^⑪ 詳しくは順次見ていくように、『沖

『繩ノート』の「多様性」の概念は、それが普遍性を帯びて見えること自体に歴史性を見出していくべきなのである。

三、「多様性」のアメリカ——ユダヤ系アメリカ人の身体

『ハックルベリー・フィンの冒険』に、ミシシッピ河を旅する途上、はぐれていたジムと再会したハックが、気まぐれにジムを騙す場面がある。本心から心配していたジムの怒りに驚いたハックは、白人のプライドに賭けて十五分かけて悩みぬいた末に、黒人奴隷に向かって頭を下げる。

この出来事はハックのような道徳的に敏感な人物が、どうしても経験しなければならぬ道徳的試練と発展の始めである。そして愛情の要請によってハックがこれまであたりまえのことと思っていた道徳律を無視して、ヂムを奴隷制度から救う決心をする時、彼の人物は英雄的なものになるのである。

右の文章は、ジムに「頭をさげ」、続いてジムを密告するための手紙を破り捨てたハックの行動に倫理的な偉大さを見る。ハックがトム・ソーヤーよりも偉大なのは、彼が「正しい」行動をとったからではない。「十九世紀の中葉の南部の少年の良心」に照らして「間違った」やり方で彼の問題を解決したからこそ彼は偉大となる。ハックを前に読者は「道徳的理性の明らかな命令と考えているものはたんに彼の時代と場所のしみこ

んだ慣習的信条ではないと再び確信することもできなくなる」のであり、だからこそ人々はその本を「普遍的」と呼んで賞賛する¹⁴。

と、このような論理でハックを称える右の文章は、ハックを「アメリカに癒着していない自由なヒーロー」と呼んだ大江のものではない。ユダヤ系アメリカ人初の大学英文科教授にして「ニューヨーク知識人」の中心人物、ライオネル・トリリングの『The Liberal Imagination』（一九五〇）¹⁵からの引用である。大江の語るハック像は、トリリングが描き、アメリカ現代文学に踏襲されていたハック像に依拠しているのである。

「ニューヨーク知識人¹⁵」とは、ユダヤ系アメリカ人を中心に形成され、主に雑誌「パーティザン・レビュー」に拠って言論活動を行った「知識人」の一群である。トリリング、アーヴィング・ハウ、アルフレッド・ケイジン、ダニエル・ベルといった人物のほか、六〇年代の大江が頻繁に言及するラルフ・エリスン、ソール・ペロー、ジェイムズ・ボールドウィン、ノーマン・メイラー、W・H・オーデン、『沖繩ノート』で言及されるハンナ・アーレントとスーザン・ソントグもその系譜、もしくは圏域に位置づけられる¹⁶。このユダヤ系知識人たちの思想の中心にあったのが「多様性」の称揚であり、「単一性」の拒否だった。トリリングは、『The Liberal Imagination』序文で、修正リベラリズムと言うべき思想を表明している。アメリカの国是たるリベラリズムがある程度達成されたいま必要なのは、その弱点

である「単一性」、具体的には人種差別などを修正し、「多様性」を維持しつづけていくことだという主張である。その際、不可欠な役割を果たすのが、画一主義に陥る大衆や、強権を發動する国家から「疎外」されるゆえに、自立した批評的自由を確保し得る「知識人」だとされた。¹⁷⁾

ユダヤ系知識人は白人中心のアメリカ社会で疎外されてきたが、第二次大戦後のユダヤ系知識人の大量亡命、「赤狩り」による既存の左翼知識人の放逐、反スターリン主義的な立場の標榜等が要因となつて、冷戦期にアメリカの学術界・美術界を席捲した。その「多様性」の思想に照らす限り、共産主義国家は「単一性」に覆われた国家として否定されるべきものだった。

ただしその思想は「赤狩り」に帰結したような単純な反共主義とは必ずしも一致しない。そこで否定されたのは、共産主義^{ホルンビズム}それ自体と言うよりは、一党独裁がもたらす全体主義的な画一化だった。アーレントによれば、「画一主義の危険や自由に対する画一主義の脅威は、あらゆる大衆社会につきものである¹⁸⁾」、アメリカにおいてもマッカーシズムのような画一化は起こる。「国内での「アメリカ主義」の増大」は外国での「共産主義的プロパガンダ」¹⁹⁾と同様に否定されなければならない。「ニューヨーク知識人」たちが求めたのは、民主主義というイデオロギーを擁護することではなく、あらゆるイデオロギーから遠く、自由で、普遍的存在たることだった。ダニエル・ベルは、冷戦下アメリカの「知識人」の役割を次のように語る。

疎外はニヒリズムでなく、ひとつの積極的役割である。

すなわち、いかなる主義主張にも溺れることを防ぎ、あるいはいかなる共同体の具体的形態も最終的なものとして受けられないようにする、なにもものにとられぬ態度なのである。また、疎外は自己の根源あるいは祖国を否認するような根なし状態でもない。批判的なアメリカ観は、反米的になるように、あるいは民主主義的諸価値を拒否するようにはアジアやアフリカの知識人に影響を与えてはいないか、と若干の非公式筋のイデオログたちは恐れている。

しかし、これは思想生活に関する偏狭な見解である。党派的人びとと批評家とが思想と経験の検証である限りなき対話において、ともに正当に発言するとき、社会はもつとも活気に満ち、魅力的になる。その希望にあふれた未来の敵対者にならずに、母国の批評家たりうるのである。²⁰⁾

「疎外」を「積極的な役割」として引き受け、「なにものにもとられぬ態度」をとることがデモクラシーのアメリカに相応しい「知識人」の態度だとベルは言う。民主主義に固執することとはむしろ非民主的で共産主義的な振る舞いであり、「批判的なアメリカ観」を容れて「多様性」ある議論を行うことが真に民主的で愛国的な態度とされるのである。冷戦を闘うアメリカにおいて、真にアメリカ的なものは普遍的な顔をしていた。

興味深いことは、冷戦下アメリカの愛国心を支える屈折した論理が、黒人差別やベトナム戦争に歪みを露わにするアメリカ

を批判する想像力をも備給していたことである。この時期、ベローの『オーギー・マーチの冒険』（一九五三）やエリスン『見えない人間』に続いて、リチャード・ライト『アウトサイダー』（一九五三）、ジャック・ケルアック『路上』（一九五八）等の、放浪者の物語が大挙して紡がれ始める。放浪者たちは、アメリカの歪んだ社会から脱走し、時に菌向かう²¹。その行動は、「リベラリズムの国アメリカがその構成員に保証する「自由」を意味するものとして理解され賞賛され」、²²「移動の自由こそがアメリカの夢の基盤であるとする思考法を支え」たとされる。

トリリングが再発見したハックも、ミシシッピ河の「神聖」な放浪者であり、荒廃する現代アメリカに對置される存在だった。トリリングによれば『ハックルベリー・フィンの冒険』は、人類一般に関わる問題を扱う「普遍的」な作品であるが、同時にアメリカ南部と特殊な関係を有した作品でもある。その主人公ハックは、「南北戦争の終焉とともに、資本主義が確立し」、アメリカ人の生から抜け落ちた何ものか——「ある種の単純さ、イノセンス、平和など」——を体現している（『The Liberal Imagination』²³）。「多様性」の思想は、古き良きアメリカの放浪者ハックを召喚して、冷戦下にアメリカの「Identity」（E・H・エリクソン）²⁴を束ね直したのである。

神話批評家としても知られるレスリー・フィードラーの『終りを待ちながら——アメリカ文学の原型Ⅱ——』（一九六四）²⁵は、アメリカ文学史を塗り替えたと言われる作品である。そこで

は、『オーギー・マーチの冒険』のソール・ベローをはじめ、ユダヤ系作家に象徴的な意味が与えられる。その論理は、アメリカの始原的本質を体現するハックを現代に甦らせたのがユダヤ系作家だというものだった。

「二〇世紀の半ばにおいて、そうした彼「ハック」に何が起ったか？ 三〇年代の生き残りの人たちのためにソール・ベローによって想像し直された彼は、シカゴ北西部の出身者となり、ユダヤ人のけちなやくざのために働き、カフカやマルクスを読み、レオン・トロツキーと一緒に暮すために出かけてゆき、オーギー・マーチという名前になるのである。あるいは、さらに、彼はJ・D・サリンジャーによって「…」²⁶

都市化の進展と大量生産によって「疎外」を強いられた現代アメリカ人にとって、ユダヤ系作家こそが信じるに足るとフィードラーは言う。なぜなら、「古いアメリカ的知恵（家そのものが亡命であり、どこにいても自分は疎外されていると感じるのは人間の本性だということ）を二十世紀のアメリカ人、つまり都会の住民にとって妥当な言葉で言い直すことができたのはユダヤ人であった」からである。これはつまり、「多数から一つへ」という理念のもとにアメリカの「Identity」を批判的に束ね直す論理である。

以下に引用するような、大江のハック像やアメリカ文学理解は、フィードラーが描く文学史の論理展開と重なる。

ハックルベリイ・フィンを読んで育つたにちがいない戦後アメリカ文学の作家たちのヒーロー群に、いかにもたびたび、僕は、ハックルベリイ・フィンの後裔たちを見出してきたではないか？ 『オーギー・マーチの冒険』に、『鹿の園』に『地上より永遠に』に、『ライ麦畑の守護神』に『走れ、ウサギ』に。ミシシッピー川を流れる筏のかわりに、アメリカ全土を覆うハイ・ウェイを疾走する自動車を採用した二十世紀のハックルベリイ・フィンが『路上』のヒーローである。（「アメリカ旅行者の夢——地獄にゆくハックルベリイ・フィン——」）

ここではベローやメイラーといったユダヤ系作家の作品に加え、現代社会から意図してドロップアウトした『路上』の放浪者がハックの生まれ変わりとされる。大江は、当時のアメリカ文学研究上の新しい論理を用いて、「今日のアメリカの文明の世界」のなかに甦った、アメリカの根源にまつわる感性をユダヤ系作家の主人公に見出していることになる。

かかる認識のもと大江は、小説・エッセイ・ノートなどのジャンルを超えて、ユダヤ系アメリカ人のごとき、「疎外」による「identity」を追究していく。「月の男」^{ムーン・マン}（一九七二・一〇）では、アメリカの夢を体現する宇宙飛行士になり損ねたユダヤ系アメリカ人が主人公に据えられた。評論『壊れものとしての人間——活字の向こうの暗闇——』（一九七〇・二）では、「イディッシュ語→英語、あるいはイディッシュ語→英語→日本語の鋭い緊張

関係のなかに身をおいて生きてゆこうとする」ユダヤ系アメリカ人の言語感覚と、小説家としての自分の言語感覚が重ねられた。そして「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」（一九六九・二）や「みずから我が涙をぬぐいたまう日」（一九七二・一〇）といった作品では、「ニューヨーク知識人」の圏域にあるオーデンやジョージ・シーガルの作品を取り込みながら、小説家が小説を書き、「言葉」を問う行為自体が主題化された。

右二篇では、戦時下の「谷間の森」の「父」の記憶を聖痕として抱える小説家の物語が綴られたが、『壊れものとしての人間』では、「谷間の森」における原体験が、やがて「小説家」となる「ぼく」の、「ほんものの言葉」の喪失体験として語られた。「ぼく」は、戦時中に「谷間の森」で育つたゆえに、貧困な現実世界を前に、豊穡な虚構世界と現実との同定を放棄してしまい、不安定な言語世界を生きてきたと言う。

「ぼく」は「真の話し言葉を喪ないつつ、活字のむこうの暗闇にむかつて、自分を追放したのだった。そしていったんその世界にはいりこむと、そこでめぐりあうものを、あらためて現実世界との identification をおこなうことはなしに受けいれてきた。それは現実のぼく自身を一種の架空のもの、まことに不安で破れやすい平衡において総合的な自分を確保しているのみの存在へと、転落せしめることであるはずだった。

ここで語られているのは、言語によって世界との接点を探り

続け、「疎外」され続ける「小説家」の「identity」である。「不安で破れやすい平衡において総合的な自分を確保しているのみ存在」（＝「壊れものとしての人間」とは、言わばつねに、あらかじめ世界から「疎外」され、しかしそれゆえに新しい「identity」を求めうるような、特権的存在の謂いである。かかる言語喪失を抱え込んだ「小説家」は、現実を個人的に生きるだけでつねに、あらかじめ「疎外」される、魔術的な身体を持ち主となる。『沖縄ノート』と並行して書き綴られたこの評論において、「小説家」としての大江は、「亡命」を故郷とするユダヤ系アメリカ人の身体を獲得したことになる。

四、耳を澄ます大江健三郎——『沖縄ノート』と

「谷間の森」

「谷間の森」を取材した雑誌「Switch」（一九九〇・三）の表紙に、森のなかで眼を閉じ、耳を澄ます大江の印象的な写真（操上和美撮影）が用いられている。そこに収められた記事で大江が、「昔はマーク・トウェインの小説のハックルベリー・フィンのように、夜あの山に入り込んだものです」と語ることは示唆的である。この写真に写しだされた大江のすがたは、「ニューヨーク知識人」につらなる「知識人」大江のあり様を見事に象つたものと言えるからである。

『壊れものとしての人間』によれば、「谷間」は、「都市生活者」たちが想像する「一元的な共同体というイメージ」とは対照的

な「多様性にみちた世界」である。その小さな、しかし「多様性」にみちた「谷間の森」で、少年だった大江は「谷間の言葉で、自分の口から村の歴史を語る」老婆の話のみにひたすら「耳をかたむけていることをのみ望んだ」。

小っぼけながらも明治初年の一揆から大正の暴動をへて、いったん開かれた想像力の流れはそこに流れつづけていたとみなすべきであろう。話を聞く子供らはやりばのない昂揚感をいだいては、それぞれに具体的な細部を補填するための想像力をおっかなびつくりながら行使したのである。

国家をあげて想像力の多様性がおしつぶされていた戦いの日々、森の奥の窮屈な谷間で。

「谷間の森」とは、戦争中にあっても、「多様性」ある世界が存在した理想的「共同体」なのである。だが、そこで老婆の話に耳を澄ます大江のすがたには、アメリカのすがたを重ね見ないわけにはいかない。「戦いの日々」を「多様性がおしつぶされていた」時代とみなし、「一元的」なイメージの烙印を押す史観は、日本の特殊な近代化を肯定するために、明治の自由民権運動家を礼賛し、戦争を日本近代の発展過程のなかの「たんなる一時的な脱線」²⁸とみなしたE・O・ライシャワール、アメリカの日本近代化論者の論理と構造的に異なるものではない。ライシャワーが、明治の自由民権運動家に、「試行錯誤を重ねながら、しだいに政党と議会政治の形態をつくりあげていった」、「今日の民主主義の基礎的形態」²⁹を見出すのと同様に、『沖縄ノート』

では沖繩の自由民権運動家謝花昇が、民主主義の原点に関わる存在として再発見されている。「多様性」によつて意味づけられる「谷間の森」は、「ぼく」を「疎外」させ、「小説家」たらしめるために仮構された、アメリカ的な世界なのである。

『沖繩ノート』でも、耳を澄ます大江のすがたが印象的に描かれる。たとえば『沖繩ノート』の末尾に向かう次の場面では、「ラジオ」の声に沖繩の人々の「多数の顔」が浮かび上がる。

僕はいまポータブル・ラジオから、沖繩全軍労が第三波ストライキを回避することに決定した、という報道を聞く。

あえて眼をとじるまでもなく、あの暗く荒あらしい雨風のうちなる集いとピケ、上原全軍労委員長とその周囲の人々の風貌と声、それをこえてデモの列にたつらなるまことにさまざまな多数の顔が濃く明瞭によみがえる。〔IX〕

ここで「ラジオ」は、一篇の主題に関わり、「多様性」に満ちたメディアとして描かれる。一方で、『沖繩ノート』に描かれる「テレヴィ」は、「サンフランシスコ条約に調印して沖繩を切り離れた政治家の「国葬」を「こけおどかしに壮重きわまる悲しみのアナウンス」〔Ⅷ〕で垂れ流すものでしかない。「万博」の「中継」があつた日の深夜、沖繩の風景を映し出す「テレヴィ」を眺めていた大江は、闘牛が「沖繩の帝王」ランパード高等弁務官ともども映し出されるのを見て激情にさえ駆られる。

ランパード高等弁務官夫妻をふくみこんでの植民地の住民の享楽という雰囲気をかもしだす、このカメラの前で闘う

な、沖繩などどこも風といった万国博の開会式典の中継のあと、一服した日本人に、風変りな南島風物のスケッチをやつてみせるようなテレヴィ番組のために、牛の豪傑たちよ、闘うな！ と叫ぶ思いでいたのである。〔Ⅷ〕

実際には、当時のテレヴィ制作者たちは、自身が用いるメディアの特性を思考し、「中継の思想」³⁰を紡ぎだしていた。にもかかわらず『沖繩ノート』の「テレヴィ」は、単一な声に象られた、「一元的」なものとして図式的に語られるものでしかない。この眼差しは、『壊れものとしての人間』のそれとも重なり合う。

森の奥の谷間で語られる言葉よりほかの、いかなる話し言葉にも、ぼくは、それが真の言葉、ほんものの言葉ではない、というかすかな徴候をかぎつけずにはいられない。しかもテレヴィの電波は、いまや谷間の言葉自体をも変えた。

「テレヴィ」は「森の奥の谷間で語られる言葉」、「真の言葉、ほんものの言葉」を失わせ、「多様性にみちた世界」を失わせた。『沖繩ノート』において、「テレヴィ」は画一的なものとして描かれる。対して「ラジオ」は、沖繩の人々の「多数の顔」を導く特権的なメディアである。このとき耳を澄ます大江のすがたには、ユダヤ系アメリカ人のすがた、「疎外」される「知識人」のすがたを重ねるべきだろう。『沖繩ノート』は、「単一性」を拒否し、「多様性」を称揚する、アメリカにとつての冷戦の布置を、まさにその身体に刻印されたテキストなのである。

『沖繩ノート』は、「ポータブル・ラジオ」に耳を澄ます大江のすがたを描き出し、かりそめの結末に向かう^③。

日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか、という暗い内省の渦巻きは、新しくまた僕をより深い奥底へとまきこみはじめ。そのような日々を生きつつ、しかも憲法第二二条にいうところの国籍離脱の自由を僕が知りながらも、なおかつ日本人たりつづける以上、どのようにして自分の内部の沖繩ノートに、完結の手だてがあるか? 「IX」

『沖繩ノート』で大江は、沖繩から「疎外」される場所に身を置き、自らの身体に刻まれた「傷痕」に賭けて、沖繩を縛り付けてきた「言葉」——「本土」「沖繩問題」——を拒否するとともに、その「言葉」への問いかけのなかに「想像力」の「多様性」を拓こうとしていた。その問いかけは末尾に至っても閉じられることなく、未だ見ぬ「多様性」に満ちた「共同体」の夢と重なり合いながら、「僕」を「疎外」された者の場所に置き続ける。

もちろん、『沖繩ノート』の批評性の根幹は、この遂行性にこそ関わる。「日本人」をめぐる終わらない問いは「日本人」の境界を固定化することを許さない。「僕」が夢想する未到の「共同体」は、沖繩の他者からの「拒絶」を前に、なお「友情」を結ぼうとする遂行性を基礎としている。そうした「多様性」への「想像力」は、いまなお有効な批評性を持つ。

ただし「多様性」は透明な価値としてあるわけではない。『沖繩ノート』の遂行性は、「僕」が、つねに、あらかじめ「疎外」されていることによって維持されている。『沖繩ノート』の批評性を支えるのは、冷戦下に、ユダヤ系アメリカ人作家を介して獲得された、「疎外」される者の身体である。そこには、冷戦体制下における大国アメリカへの批判が、普遍的な顔をした、真にアメリカ的なものによって批判されるという皮肉な構図がある。

注(1) 新城郁夫「「につぼんを逆さに吊す」——来るべき沖繩文学のために」(『到来する沖繩——沖繩表象批判論』二〇〇七・一、インパクト出版会)、二二頁。

(2) 大江健三郎「人間をおとしめる」とはどういうことか——沖繩「集団事件」裁判に証言して——(岩波書店編『記録・沖繩「集団自決」裁判』二〇一一・二、岩波書店)、二三頁。

(3) 山下若菜「〈開かれた自己否定〉へ向けて——七〇年前後・大江の試行——」(『昭和文学研究』三八、一九九九・三)、八四頁。

(4) 前掲、山下若菜「〈開かれた自己否定〉へ向けて」、八八頁。
(5) 新城郁夫「沖繩を聞く、大江健三郎『沖繩ノート』」(『沖繩を聞く』二〇一〇・一二、みすず書房)、一八〇頁。

(6) 小熊英二「革新ナショナリズムの思想」(『日本人』の境界——沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで)一九九八・七、新曜社)、五四一頁。

- (7) マーク・トウエーン(一八八五)『ハックルベリイ・フィンの冒険』(一九四一・二)三、岩波文庫、中村為治訳)。
- (8) Handlin, Oscar. *The uprooted: the epic story of the great migrations that made the American people*. 1951, Little, Brown and Company.
- (9) ①前掲、新城郁夫「」につぼんを逆さに吊す」二五頁、②前掲、新城郁夫「沖繩を聞く」一八七〜一八九頁。
- (10) 越智博美「戦後少女の本棚——第二次大戦後の文化占領と翻訳文学」(『モダニズムの南部的瞬間』二〇一二・三、研究社)は、「アメリカの郊外に暮らす核家族が冷戦の政策の要諦をなし、またその家族を介してジェンダーとセクシュアリティもまた封じ込められていった」(二三四頁)と概括する。
- (11) アメリカがいかに自由な国を見せつけ、政府批判を含めた「多様性」を許容することが冷戦を闘うアメリカの主要戦略だったことは、土屋由香『親米日本の構築——アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』(二〇〇九・一〇、赤石書店)、渡辺靖『アメリカン・センター——アメリカの国際文化戦略』二〇〇八・五、岩波書店)等で検証されている。渡米に際して大江が活用したIVPは、その中心をなすプログラムだった。
- (12) 一條孝夫「大江健三郎と六〇年代の〈アメリカ〉——ラルフ・エスンのいわゆる〈多様性〉をめぐる——」(『大江健三郎・志賀直哉・ノンフィクション——虚実の往還——』二〇一二・八、和泉書院)、二八〜二九頁。
- (13) 山下昇「冷戦とアフリカ系アメリカ人——ラルフ・エリソン『見えない人間』再考」(山下昇編『冷戦とアメリカ文学——21世紀からの再検証』二〇〇一・九、世界思想社)、二二六〜二五二頁。
- (14) Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination*, 1950, The Viking Press. 邦訳に大竹勝訳『文学と精神分析』(一九六九・一一、評論社)があるが、序文は未訳。引用は同書二三五〜二三七頁。
- (15) 「ニューヨーク知識人」については、矢澤修次郎『アメリカ知識人の思想——ニューヨーク社会学者の群像』(一九九六・六、東京大学出版会)、堀邦維『ニューヨーク知識人——ユダヤ的知性とアメリカ文化』(二〇〇〇・六、彩流社)等を広く参照した。
- (16) 堀邦維「ニューヨーク知識人関係者一覧」(前掲、堀邦維『ニューヨーク知識人』)に基づく。
- (17) 三杉圭子「冷戦とリベラル・イマジネーション——ソール・ベローの『オーギー・マーチ』」(前掲、山下昇編『冷戦とアメリカ文学』)、八六〜八七頁を参照。
- (18) ハンナ・アーレント(一九五四)「画一主義の脅威」(『アーレント政治思想集成2 理解と政治』二〇〇二・一一、みすず書房、山田正行訳)、二七五頁。
- (19) ハンナ・アーレント(一九五四)「夢と悪夢」(前掲『アーレント政治思想集成2 理解と政治』、矢野久美子訳)、二六一頁。
- (20) ダニエル・ベル(一九六〇)『イデオロギーの終焉——1950年代における政治思想の涸渇について——』(一九六九・八、東京創元社、岡田直之訳)、一八〜一九頁。
- (21) 詳細は別稿を期すが、この放浪者の系譜に、『沖繩ノート』に登場する二人のユダヤ系アメリカ人、スーザン・ソインタグと

ハンナ・アーレントの名を連ねることができる。

- (22) 三浦玲一「『文学』の成立と社会的な想像力の排除——『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の現在とコーマック・マッカーシーの『ザ・ロード』」(三浦玲一編『文学研究のマニフェスト——ポスト理論・歴史主義の英米批評入門』二〇一二・一二、研究社)、七五頁。
- (23) 前掲、トリリング『文学と精神分析』、二三八頁。
- (24) 「Identity」の概念を提唱したE・H・エリクソンもユダヤ系アメリカ人だった。エリクソン(一九六八)『主体性——青年と危機』(一九六九・一〇、北望社、岩瀬庸理訳) 参照。
- (25) 『終りを待ちながら——アメリカ文学の原型II——』(一九八九・五、新潮社、井上謙治・徳永暢三訳)。
- (26) 前掲『終りを待ちながら』、八一〜八二頁。
- (27) 大江健三郎・新井敏記(取材・文)・操上和美(写真)「未来を愛する人の物語」(「Switch」一九九〇・三)、四八頁。
- (28) ハリー・ハルトウーニアン「あいまいなシルエット」(『歴史と記憶の抗争——戦後日本』の現在』二〇一〇・四、みすず書房)、五二頁。
- (29) E・O・ライシャワー『日本近代の新しい見方』(一九六五・一〇、講談社)、八〇〜八一頁。
- (30) 萩元晴彦・村木良彦・今野勉『お前はただの現在にすぎない——テレビになにが可能か』(一九六九・三、田畑書店)。
- (31) 前掲「沖繩を聞く」において新城郁夫は、末尾の場面でラジオを聞く大江が、ラジオの声を「決然と聞き違えていること」に触れ、そこに『沖繩ノート』全体を貫く国民主義的な思考を

解体する契機を見出ししていた。ただし本論では、ラジオを介して表現される思考の枠組みの来歴を、まずは確認しておきたいのである。

*『沖繩ノート』本文の引用は岩波新書版による。引用文中の傍線、「…」(省略)、／(改行)、「」(注記)は稿者による。なお本稿は、特集「再編される東アジアと『文学』」(二〇一二年度日本近代文学会秋季大会)における口頭発表に基づく。

【キーワード】大江健三郎、identity、多様性、ニューヨーク知

識人、冷戦